

理数系知識深め合う

弘前県内3高校生徒が発表

県高校理数系課題研究発表会が6日、弘前大学理工学部で行われた。五所川原高理数科、三本木高と八戸北高のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）クラスの1、2年生約270人が、グループごとに取り組んできた課題研究について発表した。

発表会は県高校理数教育協議会が主催して15回目。生徒たちは数学・地学、物理、化学、生物の4分科会で発表した。弘大の教員から助言を受けたり、生徒同士で質疑応答したりして知識を深め合った。

生物分野では八戸北高の

鎌田康太郎君（2年）らのグループが「アゴハゼの睡

眠について」と題し発表。40秒以上の静止状態を睡眠と定義し、赤外線カメラで魚のアゴハゼ6匹を24時間観察した。頻繁に刺激を与えて疲れさせたグループのアゴハゼは睡眠の頻度が高まったため、「睡眠と疲労の関連は深い」と結論づけた。



研究の成果を発表する生徒たち

ほかにも五所川原高が「ペニシリン精製に挑戦」、三本木高が「三本木・夢と生命の森での樹木に関する研究」などのテーマで多彩な発表を繰り広げた。

（久保信行）

※この画像は当該ページに限って
東奥日報社が利用を許諾したものです。
[問合せ先]弘前大学理工学研究科
jm3505@cc.hirosaki-u.ac.jp